

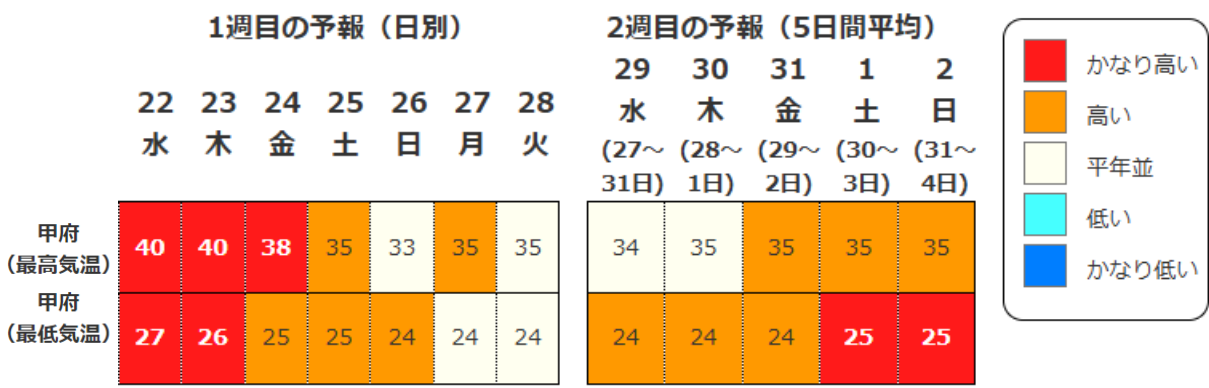
高温に対する農作物の技術対策

令和 8 年 7 月 2 1 日
農 業 技 術 課

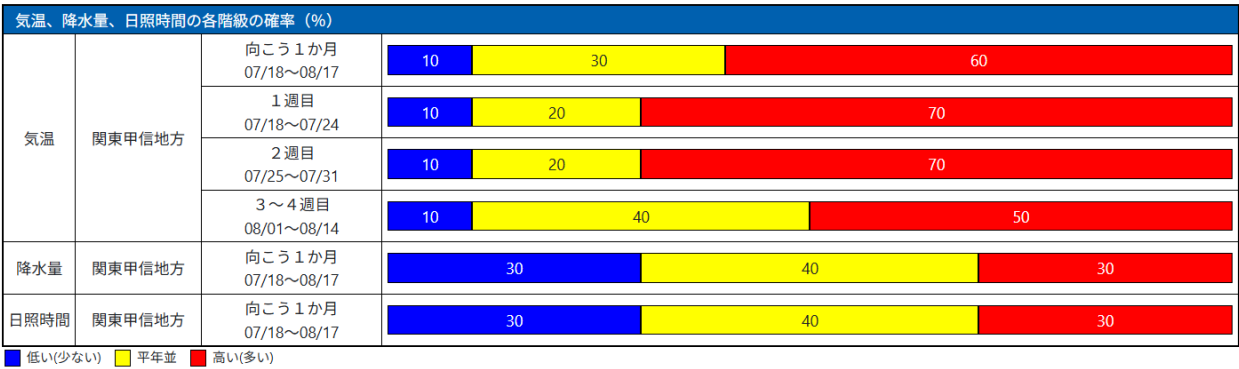
1 気象概況

関東甲信地方では、7 月 2 0 日に梅雨明けしたとみられると気象庁から発表されました。この先の 2 週間予報では 3 5℃以上の猛暑日が続く、また、1 か月予報でも、気温がかなり高くなる見込みとなっているため、高温とそれに伴う乾燥による農作物への影響が心配されます。今後の気象推移に注意し、農作物の管理を徹底すると共に、熱中症にも十分に気をつけて下さい。

＜週間予報 7 月 2 1 日 1 7 時発表 甲府地方気象台＞



＜1 か月予報 7 月 1 6 日発表 甲府地方気象台＞



2 技術対策

○果樹

＜果樹全般＞

- ・ 高温が続く乾燥する場合は、定期的なかん水に努める。成熟期の園では約 5 日間隔で 2 0 mm、果実肥大期の園では 4 ～ 5 日間隔で 3 0 mm、収穫後の園では約 7 日間隔で 3 0 mmを目安とする。一度に多量のかん水を行うと果実品質の低下を招くので避けるとともに、収穫 5 ～ 7 日前からはかん水は控える。なお、かん水は気温が下が

る夕方等に行う。

- ・樹冠下は敷ワラ、敷草を実施するとともに、草生栽培園では草刈を励行する。
- ・かん水施設等のない園は、SSなどで樹冠下を中心に1樹当たり200～300リットルかん水する。
- ・圃場が乾燥するとアザミウマ類やハダニ類の発生が多くなることが懸念されるため、定期的な防除を徹底する。
- ・この時期は大気の状態が不安定なことが多いため、高温以外にもゲリラ豪雨なども視野に入れて、気象情報をこまめにチェックする。
- ・収穫が終わった園では、枝の登熟を促すため、定期的なかん水を徹底する。

<モモ>

- ・高温により地色の抜けが早まることが予想されるため、地色や熟度をこまめに確認し、除袋作業を行う。
- ・収穫については、最高気温が35℃前後になると、着色などの成熟が遅延する傾向があるため、果実硬度2～2.5kgを目安に適熟収穫に努める。
- ・日焼け果防止のため、着色期の過度な葉摘みや新梢（徒長枝）の剪除は避ける。
- ・反射マルチを敷く前にかん水を行う。
- ・反射光の強いマルチは、日焼け果などが起きやすいので、白色マルチを使用するか、反射マルチを敷く量や反射程度（古いマルチや裏面の使用など）を調節する。着色が進み次第マルチを除去する。
- ・下垂枝への支柱やつり上げにより、反射マルチとの距離を確保する。
- ・果実の日持ち性向上のため、収穫は気温の低い朝に行う。

<スモモ>

- ・日焼け果の発生を抑制するため、新梢管理は高温が続く場合は控える。
- ・収穫期に高温が続く場合は過熟果の発生が心配されるので、着色にとらわれず、果実の弾力と熟度を優先した収穫に努める。
- ・果実の日持ち性向上のため、収穫は気温の低い朝に行う。

<オウトウ>

- ・花芽分化期以降の高温、乾燥は翌年の双子果の発生原因となるため、20～30mmのかん水を定期的に行うとともに、敷ワラ等により土壌乾燥を防止する。
- ・ハダニ類の発生に注意し、収穫後も定期的な防除に努める。

<ブドウ>

- ・着色期のブドウは、夜温低下による着色向上を図るため、夕方のは場散水（5mm程度）や棚面への散水（200リットル／10a）を行う。
- ・日焼けや縮果症等の対策として、高温が続く前に新梢の誘引を見直し、果実に直接日が当たらないようにする。
- ・着色始めの品種では、果房が高温にならないよう、過度な新梢の切除や摘葉を控え、

必要以上に棚面を明るくしない。

- ・シャインマスカットでは、日焼けや縮果症を防ぐため、果粒軟化期以降に新梢管理を実施する。
- ・新梢伸長が続いている樹は、着色が全体に回った時期に、新梢先端の摘心と副梢を2～3枚残して摘心し、養水分の競合を防止する。

○野菜

- ・高温が続く乾燥する場合は、健全な生育を促すため、定期的にかん水する。水田を利用した圃場でうね間かん水を行う場合は、地温が低い早朝か夕方に実施し、株元まで水位が上がらないよう注意する。
- ・地温の上昇や土壌水分の蒸発を抑えるため、敷きワラや敷き草を行う。
- ・高温や乾燥により草勢が落ちている場合は、根からの養分吸収が十分に行われないことがあるため、必要に応じて液肥の葉面散布を行い、回復を図る。
- ・圃場が乾燥すると、アザミウマ類、ハダニ類、オオタバコガなどの害虫による被害増加が懸念されるため、発生状況をこまめに把握し、発生初期の防除に努める。

<夏秋ナス>

- ・つやなし果の発生を防止するため、適切な整枝・摘葉により日当たりや風通しを確保し、草勢の維持に努める。
- ・着果負担を軽減し草勢を維持するため、収穫遅れによって肥大し過ぎる果実の発生を防ぎ、適期収穫を徹底する。

<夏秋キュウリ>

- ・着果負担を軽減し草勢を維持するため、奇形果や変形果などの不良果は早めに摘果し、健全果（良果）は収穫遅れにより肥大し過ぎないように適期収穫を徹底する。

<夏秋トマト>

- ・ホルモン処理を適切に実施し、着果の安定化を図る。ただし、高温時の処理は空洞果等の発生を助長するおそれがあるため、涼しい時間帯に希釈倍率を守って行う。
- ・尻腐れ果の発生を防止するため、適切なかん水により土壌水分の安定化を図るとともに、必要に応じてカルシウム剤の葉面散布を行う。

<キャベツ>

- ・ほ場が乾燥した状態で定植すると活着不良を招きやすいため、定植前に苗へ十分に水分吸収させるとともに、定植後も適宜かん水を行う。
- ・結球期以降に乾燥状態が続くほ場では小玉化が懸念されるため、適切なかん水により土壌水分の確保に努める。

<スイートコーン>

- ・雄穂出穂以降から収穫期にかけて降水量が少ない状態が続くと、果実の肥大不足や先端不稔の発生を招くとともに、出荷時の萎びも懸念されるため、適切なかん水を行う。また、収穫遅れによる品質低下を防ぐため、適期収穫に努める。

○花き

- ・乾燥によりアザミウマ類、ハダニ類などの害虫による被害が増加することが懸念されるため、発生状況を把握し、初期防除に努める。

<施設花き>

- ・寒冷紗などで強めの遮光をするとともに強制換気に努め、葉面温度の上昇を防止する。
- ・かん水は、気温の低い朝夕に行う。

<露地花き>

- ・敷ワラ、敷草等を行い、土壌水分の蒸散防止に努めるとともに、乾燥状態に応じ朝夕にかん水を行う。
- ・日焼けしやすい品目は寒冷紗等による遮光を行い、適切な光量および温度管理に努める。

<花壇苗>

- ・鉢上げ前の育苗期は、乾燥の影響を特に受けるので、こまめな灌水を心がける。また、通風・採光の確保に努めるが、高温の時間帯には遮光を行う。

○水稻

- ・高温時は肥料の溶出が早まって栄養不足となり、収量や品質が低下することがあるので、葉色を見ながら適期に追肥を行う。
- ・中干し後は、間断かん水を基本とし、幼穂形成期以降はやや深水管理を行う。
- ・出穂後の高温（最高気温 30℃以上、最低気温 25℃以上）は胴割れや白未熟粒の発生が増加し、品質が低下するので、穂ばらみ期以降は深水やかけ流しかんがいを行い、稲体を冷やす。
- ・出穂後30日頃落水時期を迎えるが、高温乾燥が続く場合には走水程度のかん水を行い、過乾燥による胴割粒の発生を防止する。
- ・高温年は、穂軸の黄化が進まないうちに籾の黄化が進行する「籾先行型」の登熟となるため、籾の黄化状況に注意して適期の収穫を心がける。

○大豆

- ・8月上旬頃から開花が始まる。開花期以降の高温乾燥は、落莢や子実の肥大不足により減収となるので、高温乾燥が続く場合は畝間かん水を行う。

○茶

- ・敷草により乾燥を防止するとともに、定期的なかん水に努め樹勢の維持を図る。

○畜産

- ・良質で消化率の高い飼料の給与、ビタミンやミネラルの補給及び清浄で冷たい水の給与に努める。

- ・高温時は飼料や水が劣化しやすいので、残渣等を放置しない。
- ・健康悪化の兆候がないかなど、家畜の健康状態をよく把握するため、観察の頻度を増加させ、快適性に配慮した飼養管理に努める。

<舎飼い家畜（牛・豚・鶏等）>

- ・飼育密度の緩和、換気扇や扇風機等による送風や散水・散霧を行い、家畜の体感温度の低下に努める。
- ・寒冷紗やよしずによる日除け、屋根裏・壁・床への断熱材の設置及び屋根への消石灰の塗布等により畜舎環境の改善に努める。

<放牧家畜（主に牛）>

- ・放牧する時は、朝・夕などの涼しい時間帯での実施や、日陰林等のある放牧地での実施に努める。飼料作物については、排水不良が懸念されるほ場では、湿害対策のため排水の確保に努める。

○その他（熱中症対策）

暑熱環境下での作業は、熱中症（熱射病、熱けいれん、熱まひ）を生じる恐れがあるので、次の事項に注意する。

- 気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等の作業時間を工夫する。
- 水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給する。大量の汗をかいたときは、水分とともに適度な塩分も補給する。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に気を付ける。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装を着用する。体温の上昇を防ぐため、ファン付きウェアやネッククーラーなどの使用も検討する。
- 作業場所には日よけを設ける等、できるだけ日陰で作業する。
- 屋内では遮光や断熱材の施工等により、作業施設内の温度が著しく上がらないようにするとともに、風通しをよくし、室内の換気に努める。
- 作業施設内に熱源がある場合には、熱源と作業者との間隔を空けるか、断熱材で隔離し加熱された空気は屋外に排気する。
- 万一に備えて一人での作業は避け、こまめに声を掛け合い安全を確認する。どうしても一人で作業する場合は、家族などに行き先や作業内容、帰宅時間などを伝え定期的に連絡を取る。
- 日頃から体調管理に留意する。寝不足や病み上がりなど、少しでも体調に不安があるときは決して無理をしない。